

二〇二三年五月二三日

方円の窓が切り取る庭若葉
雨の小屋吊り玉葱の匂ひ満つ
あるなしの風に舞ひ散る竹落葉
青時雨港の見える丘にたち
春草の宝庫となりぬ更地かな
香水も昔のままや同窓会
若葉燃ゆ樹下に連なる人力車
籬声の一段高き初鰹
バリトンは九十翁や風薫る
中空に蛸をどりせる青毛虫

二〇二三年五月二二日

伽羅路の煮たつ香りに母恋し
筍を売る朝掘りと大書して
潮臭き漁網繕ふ波止薄暑
ガンダムの巨像霞に立ちにけり
短夜や最終章を脱稿す
立ち憩ふ橋の真上に夏の雲

二〇二三年五月二一日

一升餅重しと泣く子宮五月
久にあふ知己とべちやくちや若楓
青葉潮浴びて船頭仁王立ち
表札の裏に潜りし守宮の子
明易や一鳴き鳶の高空に
ゆく春や旅のチラシの山積みに

二〇二三年五月二〇日

草引かれ右往左往やてんとむし
老鶯に励まされつつ磴登る
雲引きて飛機は夕焼の東京へ

せいじ 千鶴 満天 むべ みきえ ひのと 智恵子 宏虎 凡士 せつ子
もとこ 宏虎 凡士 ちいむ 素秀 やよい もとこ ひのと うつぎ 素秀 みづき 董雨 明日香 あられ

雨晴れて何はともあれ草むしり
街薄暑パントマイムの白き顔
叱られて足ぶらぶらと夕端居
瀬音背に渡る飛び石歌碑涼し
玉葱を包む新聞紙の戦禍
傘立てにきのふ来た子の捕虫網

二〇二三年五月九日

巨石積む百間堤代田風
薔薇一輪活けて窓辺の予約席
豆の種うなじで土を持ち上げぬ
大声とともに筍届きたる
玉葱の匂ひ残りし軍手干す
登校の列を乱せし仔猫かな

二〇二三年五月八日

七輪に火の色のこる鮎の宿
里道の取り放題の小判草
水口の水落ち着きて夏来る
麦藁帽故郷の土に丸き影
母の日や母となる娘の声弾む

二〇二三年五月七日

旅衣解けば吉野の時鳥
立ち止る芭蕉の句碑や白日傘
麦わら帽振つて別るる峠かな
まづ浴衣なほされてゐる舞稽古
引退の古馬の眼澄める牧五月
湧き水と戯れやまずあめんぼう

千鶴 凡士 ひのと 明日香 せいじ ひのと うつぎ ひのと 豊実 かえる 千鶴 澄子 ひのと うつぎ 素秀 素秀 うつぎ 素秀 千鶴 素秀 こすもす みきお ひのと 凡士 せつ子

毎日句会みのる選・二〇二三年五月一五日